

図書館史研究会事務局

： 藤野研究室

—— 本号の主な内容 ——

- ・ アメリカ図書館史研究のビブリオグラフィ……………川崎 良孝
- ・ 省令科目改正案における「図書館史」の位置付けについて
……………寺田 光孝
- ・ 1990年度決算・同事業報告；1991年度予算・同事業計画
- ・ <予告> 第9回図書館史研究会京都セミナー開催について
- ・ 図書館史関係文献目録 1990（稿）
- ・ 編集委員会より
- ・ 事務局より

アメリカ図書館史研究のビブリオグラフィ

川崎 良孝
(椋山女学園大学)

1985年の『図書館史研究』（第2号）で、アメリカ図書館史に関する文献目録について紹介したが、この方面で、過去5年間にあった進展をいくつかまとめておきたい。

まず第一に、*Journal of Library History*は、1968年の第3号を皮切りに、1年、2年、あるいは3年間をあつかう文献レビューを掲載してきた。執筆者は、M.H. Harris, M.H. Harris and Donald G. Davis, Jr., それに Davisあるいは Wayne A. Wiegand といった気鋭の図書館史研究者たちが、継続して担当してきた。そして、図書館史についての文献を批評もまじえて、かなり網羅的に取り上げてきた。Wiegand は、“The Literature of American Library History, 1983-84” (*JLH*, vol.21, pp.723-763), それに “The Literature of American Library History, 1985-86” (*JLH*, vol.23, pp.332-364)を、各々1986年と1988年に執筆している。1988年のレビューは*Journal of Library History*としては第11回目に相当する。1988年を例に取ると、1985年と86年に出された図書館史文献 216件を取り上げている。それを、①資料源・史学史、②ソーシャル・ライブラリー、③個人文庫、④公立図書館、⑤大学図書館、⑥専門図書館、⑦研究図書館、⑧図書館協会、⑨図書館学教育、⑩資料組織、⑪伝記、⑫図書館史における女性、⑬全般的研究、⑭未刊行学位論文という項目に分けている。そして、かなり網羅的に論評もまじえて執筆している。このシリーズは、最近の研究動向や

重要な文献を知るについて最も便利であり、かつ重要なものである。

なお、Wayne A. Wiegandは、現在のアメリカ図書館史研究者の中でも、際立った人物の一人である。1986年には、*Policies of An Emerging Profession : the American Library Association 1876-1917*、1989年には *An Active Instrument for Propaganda*を、いずれも Greenwoodから刊行している。前者は、初期40年間のアメリカ図書館協会の歴史であり、後者は第1次世界大戦時の公立図書館の動きを追ったものである。いずれも、質量ともに驚くべき資料を駆使して執筆した重厚な本格的な研究書である。両書とも、既存の研究を踏まえると同時に、そうした業績を乗り越えている。

第二に、M.H. Harris が *A Guide to Research in American Library History* (Scarecrow)の初版を刊行したのは1968年であり、1974年には第2版が出版された。いずれも、学位論文の紹介を中心としたものであった。ところで、この図書を改訂する形で、Arthur P. Young が1988年になって、*American Library History : A Bibliography of Dissertations and Theses* を、やはりScarecrow から刊行した。1974年版で取り上げた学位論文は 653件であったが、1988年版では約80パーセント増大し、1,174件となっている。章立ては、第1章「資料源の案内」、第2章「博士・修士論文」、第3章「報告書など」となっている。主要部分の第2章はさらに、以下に示す14の節に分けられている。①公立図書館の先駆者、②公立図書館、③大学図書館、④専門図書館、⑤学校図書館、⑥州立図書館、⑦図書館サービス、⑧図書館学教育、⑨図書館協会、⑩伝記、⑪文献の研究、⑫検閲、⑬外国への影響、⑭その他 である。各博士論文、修士論文には、3行から10行程度の説明が加えられ、さらに図書として刊行されたものは、その書誌事項、また雑誌論文として部分的に発表されたものも、その旨が記されている。なお、UMI の購入番号も書かれており利用に便利である。

第三に、図書館史についての単行本や雑誌論文の文献目録については、Harris and Davisが1978年に刊行した *American Library History* (Texas Press)が重宝なものであった。これのいわば改訂版が、昨年末にDonald G. Davis, Jr. から筆者に贈られてきた。同書は、Davis とJohn Mark Tuckerを編者に、*American Library History : A Comprehensive Guide to the Literature*とのタイトルで、1989年にABC-CLIOから刊行された。この本は 471ページに及ぶ大部なものとなっている。章立ては、①史学史・資料源、②全般的研究、③個人文庫と読書傾向、④公立図書館の先駆者、⑤公立図書館、⑥大学図書館、⑦学校図書館、⑧州立図書館、⑨専門図書館、⑩文書館、⑪図書館学教育、⑫図書館協会、⑬図書館業務の特定の側面、⑭図書館業務における女性、⑮伝記 となっている。ところどころ誤植と思われる箇所や、抜けていると思われる文献があるものの、同書の包括性には驚くべきものがある。

最後に、アメリカ図書館史上の重要な人物については1978年に、*Dictionary of American Library Biography* (Library Unlimited) が刊行されている。これは、George S. Bobinski, Jesse H. Shera, Bohdan S. Wyner で構成される編集委員会が、1976年6月30日以前に死去したアメリカ図書館史上の重要な人物 302名を取り上げたものである。単なる人名辞典ではなく、当該人物についての最も権威ある研究者が、いわばコンパクトな伝記を研究にもとづいて執筆したものである。同書の刊行以後、*Journal of Library History*に、Louis Round Wilson

(1876-1979), Douglas Waples (1893-1978) など、その後に死去した人物についての伝記がいくつか掲載されてきた。そうしたものも含めて、1990年には1978年版を補う意味で、Wayne A. Wiegandを編者に *Supplement to the Dictionary of American Library History* が、やはり Library Unlimitedから刊行された。同書は、1976年6月30日から1987年6月30日までに死去した人物、およびそれ以前に死去したが初版で取り上げられなかった人物など、計51名を扱っている。人物史研究や有名図書館人の図書館論の研究には、まず欠かせない便利な図書である。

アメリカ図書館史研究にとって、*Journal of Library History*, それに今回紹介した Young それに Davis の文献目録、それに *Dictionary of American Library Biography* は不可欠なものであり、こうした方面に関心がある者にとっては欠かせない研究手段となるであろう。

(1991年1月20日)

■ 省令科目改正案における「図書館史」の位置付けについて

寺田 光孝
(図書館情報大学)

昭和62年以来JLAの教育部会を中心にして省令科目の見直しについて活発な議論が展開されつつあり、特に平成2年文部省生涯学習局学習情報課に「社会教育審議会社会教育施設分科会図書館に関するワーキンググループによる検討会」が設置され、司書講習での司書・司書補の科目について検討がなされるにおよんで俄に司書養成教育の見直しに現実味が帯びてきた。

JLA同部会の会報第30号では司書講習科目素案(表1)、司書・司書補講習の科目の内容(再修正案)(表2・3)、および3つのカリキュラム内容の比較表(表4)が掲載されている。表4の比較はWGの改訂案と現行および1987年8月の教育部会研究集会での提案の科目内容の比較であり、後者の研究集会での提案とは柴田案を指している。単位数においては、WGの改訂案が15単位、現行が19単位、そして教育部会研究集会での提案(柴田案)が24単位である。24単位の改正案としては、他に渋谷案、今案がこれまでに出版されている。これらの改正案での図書館史の扱いをみると、現行では乙群に「図書および図書館史」1単位が設けられているのに対して、それよりも後退している印象を受ける。WGの素案では「図書館特講」に図書館の歴史が含まれていたが、再修正案には図書館史はまったくみられない。教育部会案(柴田案)では図書館史は科目としては無く、図書館概論に組み込まれてしまっている。ただ、渋谷案では丙群で「図書館(メディア文化)史」2単位が、今案では選択科目として「図書・図書館・印刷史」が置かれている。

今後、司書資格が15単位で決着をみるのか、'初級司書'等の新設により司書の段階的職制が導入されることになるのか、またはかねてからの教育部会案のように24単位となるのか、これからの進展次第でどのような結果に至るのかは分からない。15単位にはすでに教育部会幹事会の声明(平成2年5月)で反対の立場

をうちだしているように、図書館界からも資格単位の切り下げということで反対が予想される。24単位案も難しい情勢のようである。科目としての図書館史についていえば司書講習が15単位となり、15単位の枠内で科目として取り上げられないということになればそれは致し方ないと思う。しかし、この場合は望まれる図書館学と司書講習の間の隔たりがきわめて大きいものとなり、司書講習には限定的な役割を期待するしかないものとして本来の図書館学教育とは位置付けが異なることを関係者の共通認識とする以外にないと思われる。科目としての図書館史の問題は、むしろ24単位の司書課程において内容的に大きな問題を孕むと思われる。もっとも、これも教育部会内で渋谷案、今案が今後どのような扱いになっていくか分からないが、柴田案では図書館史がなくなっており、そこでは24単位であるにもかかわらず図書館史がなくなることが問題となる。柴田案はアンケート調査結果を根拠としているようであるが、図書館学研究会でも同旨のアンケート調査が実施されており、その結果が教育部会の会報第29号、第30号に掲載されている。後者の調査は、図書館学教育に関して公共図書館長と教育担当者を対象として行われたものであり、これによれば図書館史についてはそれを現場の公共図書館員がもつべき最重要の基礎的知識・技術とみなす公共図書館長が7.37%、重要 64.42%、重要でない 27.88%となっている。教育担当者の意向をみると、図書館史が公共図書館員の基礎的な知識・技術として最重要 20.96%、重要 53.29%、重要でない 25.75%であり、大学図書館員の基礎的な知識・技術としてはどうかということについては最重要61.1%、重要 33.33%、重要でない5.56%となっている。この数値で公共図書館員の知識に求められる図書館史の位置は重要とみなすものが全体の3/4前後であり、数値そのものが絶対的に低いとはいえないが、最重要とする値が低いこと、および他の科目との数値の比較を見たとき、必要とする科目の優先順位が大きく後退する結果となっていることが気にかかる。ちなみに、会報第30号での小田光宏氏の教育担当者の意識分析では、図書館史は公共図書館員に対しては0.95、大学図書館員に対しては1.54の相対値（2に対して）となっており、31位、25位と低い。しかし、これを重要度が低いと読むことは絶対値と相対値の混同を犯すことになり、記念シンポジウム（平成2年1月）での朝比奈大作氏の発言はこうした混同に水を向けるきらいがある（同会報第29号所載）。また、同シンポジウムの質疑応答では木村秀明、和田吉人両氏から図書館史の重要性についての意見がみられるが、大勢を占めるにはいたっていない。このシンポジウムで公共図書館長の集計結果に対する感想を訊かれた発表者の朝比奈氏は、あくまで想像だがと断ったうえでの発言として、「又、図書館史はローマ時代にはどうか、平安時代には芸亭が一番最初で、という、いわゆる暗記科目であって現場ではほとんど意味がないと判断される館長さんが多いのではないだろうか」と答えておられる。

私どもの大学では、図書館情報学の専門大学であるため、必修25単位、選択130単位、必修演習6単位、選択演習14単位、選択実習2単位、図書館情報学実習3単位（必修）、卒業研究3単位（必修）の合計183単位の科目を専門科目として展開し、履修最低単位は必修37単位、選択は上記専門科目とその周辺科目66単位を展開するなかで57単位を要求している。図書館史に関しては、図書館文化史Ⅰ、Ⅱとして東洋・日本と西洋にわけそれぞれ各3単位の計6単位を教えている。他方、また私どもの大学でも夏期の司書講習を行っている。司書の養成教育

という点では、本学の教育理念は夏期の司書講習と背馳するところが大きい。ため学内には講習への反対意見も多いが、文部省の指令に抗しきれず毎年実施しているのが実情である。このため、学内措置として講習は現場の職員にかぎり、明確でないまでも、専門職への第一歩として位置付けている。講習では、図書館史はあたりなかつたり年によって異なっている。こうした事情で矛盾はあるが私どもでは本学の教育と講習は一応区別して考えてきたのであり、筆者はこれまでの司書課程または司書講習の科目見直しに関してはほとんど積極的な係わりをもたずにきた。また、これまでの見直し作業にはかなりのエネルギーが要ったことであろうし、関係者にはご苦勞があったことと思う。今全体的な取り組みをせず、討議中とはいえ結果の一部、つまり図書館史についてのみ言及しても意見が取り上げられるとは必ずしも思っていない。したがって、筆者としてはきわめて消極的な立場で感想を述べるくらいしかできない。

科目の見直しには図書館を取り巻く環境の変化、例えば図書館の機械化にみられる図書館の変化などに対応し、情報サービスやデータベースの知識や、情報管理、図書館経営論などに力点が置かれるのに別に異存はない。しかし、こうした改善への動きと並行して図書館史が疎かにされたり、書誌(学)が軽視されるとなると図書館のセンスの問題として戴けない。朝比奈氏の想像裡にみられるごとく、「図書館史」が暗記科目であるというのは間違った見方である。歴史は現在の理解に不可欠である。現在を理解しようとするならばその歴史を辿り、今日によってきたった過去を理解するに如くはない。いまさら麗々しくいうまでもなく、図書館史に関心のある人々のみならずこれは最低限の共通認識であろうと思う。

しかし、図書館史の理解に関してわが国の図書館は歴史が浅く、西欧の創造と蓄積の歴史に対して受容の歴史であることの差は大きいといえよう。戦後45年まがりなりにも図書館は発達をみてきたが、まだ、成熟期とはいえず、ましてや成熟期以降の困難さの体験はない。日本の図書館の歴史を扱う場合、西欧の図書館史にも当然眼を向ける必要があるが、図書館はこれまで単に発展してきたばかりではない。発展があり、成熟があり、停滞があり、解体や再編成があった。歴史から消失した図書館の事例も数多い。実際、個々の断絶のなかで中心を移しながら全体的には発展をしてきたということができよう。しかし、日本のように、文庫史は別として、図書館の歴史が浅いと、視点を現在に限る‘現在至上主義’ともいうべき考え方が生まれる素地が十分ある。また、現在至上主義は過去の内なる発展をみず、また断絶を織り込んで発展するという複線的また重層的発展という歴史観を前提とするよりも、単純な直線的な発展史観を前提にしているようにも思われる。暗黙の裡に時代はつねに進歩するといった進化論的ともいうべき見方を前提にしながら、この発展史観のうえにたった現在至上主義ともいうべき考え方がみられる。さらに一般的にいつ今日われわれが歴史をどう考え歴史のイメージをどう描くかの問題がある。日本では、物語としての歴史は別にして、歴史つまり時間軸への信念がきわめて薄いように思われる。その理由として、大きく3つのことがあるように思われる。一つは明治以降西欧のモデルの摂取・受容を基本戦略としてきた文化的伝統の問題、二つには明治以降の特殊または歪な近代化と第二次世界大戦の敗北という負の歴史、三つには戦後の産業化社会と技術革新の偏重の結果としての過去の否定や伝統の破壊。つねに新しいモデルの追及をこれまでやってきて、日本は高度大衆化時代を迎えているといわれるまでに

なった。これらが自然と相乗的に過去から眼をそらせる働きをしているのではなからうか。現在の日本人がこうした性向をもっているとすれば、現在を効率の観点からのみ見るのは自然であり、新しい技術知のみで十分であるとするであろう。この点ヨーロッパでは「現在は歴史に組み込まれ、未来は歴史から生まれる」といった確乎とした信念、歴史観があるように思われる。裏返せば、歴史への自信である。西欧の図書館では斬新な企てもしばしば過去に淵源をもつものがみられるが、我が国の場合新しいものが、しかも外来的な新しさが価値の源泉であるかのごとくみなされる一般的風潮がみられる。こうした風潮のなかでは、現在を過去に遡って検証することがそれほど切実な課題とはみなされないであろう。歴史研究が尚古趣味とみなされうる素地はあるように思われる。

さらに、現在は大きな曲がり角にあるという予感ないし実感がある。たしかに今日の社会がこれまで経験したことのない未曾有の社会であり、そうした先行き不透明な社会に突入しているという実感がある。近代的枠組みの終焉の問題は大きい。特にイデオロギーの終焉は、ヘーゲル的な歴史の終焉を告げるという人もいる。これまでの枠組みが崩れ、新しい枠組みの模索のなかでこれまでの歴史知が将来の指針を明確に与えるとは断定できない。歴史法則が安易に見出せるとも思われない。つまり、早急に歴史のうちに処方箋を求めても歴史が答えてくれるとは言えない。

にもかかわらず、図書館学教育のなかで歴史を排除することは、危険を犯すことになる。図書館学のなかで原論が確立しておれば問題はないかもしれないが、しかし、原論のない、あるいは原論が早急には確立し難い学問分野であることを思えば、図書館史は基礎論として重要な位置を占めて然るべきと考える。過去の歴史から学べることは単線的な発展的史観でなく錯綜した事象への複眼的思考様式である。つまり、あるときは連続性の視点で眺め、またあるときは断絶の視点から眺め、現在を考えるということである。また、少なくとも現在を長期的な視野のうちに相対化するには大いに役立つ。新しいコンピュータ・ネットワークによる情報化社会という未来構図は図書館の飛躍的発展をもたらすかもしれないが、それは同時にモデルなき社会への突入をも意味しよう。もはや歴史を卒業したといいきれるかどうか。このまま日本社会が発展の軌跡を描き続けるという保障もない。日本の経済的繁栄が永久に続くわけのものでもなからう。ヨーロッパは、確かに経済的には落ち目にある。しかし、政治・文化の総合力では肥大した経済の巨人日本の及ぶところではない。図書館についても同様のことがいえよう。ヨーロッパの図書館の歴史について思うとき、特にこの思いが強い。現在、図書館においても西欧の図書館をモデルとしてみるには問題が多いとは思いますが、少なくとも多くの経済的不況や政治的危機を乗り越え存続してきたのであり、そこには学ぶべきことも多い。逆境のなかでしぶとく生き残る戦略を考えなければならぬ時代も来るかもしれないのである。

図書館史を暗記科目とみるなどは、とんでもないことである。時代に対応するという理由から歴史を無視し、現在のみに眼を向け、あまりにも効率に焦点を当てすぎるならば、図書館そのものも痩せ細ることになるだろう。歴史を無視すれば、現在をあまりにも平板にみてしまうことになりはしないか。概論のなかの2時間ほどで歴史の何が教えられるというのであろうか。

われわれがアレクサンドリアの図書館について言うと、「図書館史は（現在の

図書館とは全く無縁の) そういうことを教えるから駄目だとみなされるのだ」といった声が聞こえてくるようである。井上如氏の文章に次のようなくだりがある。

「図書館の歴史というと、古ければ古いほど良いというので、すぐバビロニアの粘土板がどうしたとか、日本なら法隆寺の夢殿から説き起こすのだけれど、今、その必要はない。図書館の歴史は、現代から考えて、写本時代と刊本時代の区別がついていればそれで良い。つまり、図書館の歴史に最大の影響を与えたのは洋の東西を問わず印刷術の発明と教育の普及であって、それによって、図書館史は、写本時代と刊本時代に分かれるのである。」

(「情報化社会の図書館」『言語』vol. 9, no.10, 1980)

この論の全体の趣旨に異を唱えようというのではないが、その口吻に抵抗を感じる。井上氏の場合は、印刷術による時代の断絶が強調され、われわれの関係する歴史は印刷術以後でとりあえず足りると述べられている。われわれがアレクサンドリアの図書館に言及するのは、アレクサンドリアの図書館では活発にテキストの校合が行われており、文献学が盛んであったこと、そのことはとりもなおさず、図書館が当時の知的生産に従事し、知的生産センターであったことを学生に知ってもらいたいからである。この伝統は博物館図書館としての機能とともにヨーロッパの国立図書館では主要な機能の一つとして、いまでも生きているといえる。例えば、BNの機関誌をみると、そこでは資料の発掘と紹介が記事の主要部分となっていることからそのことが窺えるのである。この場合には、われわれは連続性をとりあげ、連続性の意味を問題にしたいと思っているのだ。また、伝統とともにBLにみられる解体と再編成の問題はホットな問題でもある。

また、よく参考業務は唯一アメリカ図書館界の貢献であるとか、少なくともアメリカでの新しい業務であるとか一般には言われている。たしかに、素人の利用者への援助がアメリカで始まったのは歴史的事実である。その後、玄人の利用者にもサービスが行われるようになり、サービス概念はサービス対象とともに拡大してきた。しかし、玄人の利用者に対するサービスはヨーロッパでも当然行われていたのであり、これは「ビブリオグラフィー」の概念でなされてきたし、なされてもいる。勿論、ビブリオグラフィーの概念は各国によって異なるが、大陸でのビブリオグラフィーが列挙書誌中心であることがこのことを物語っている。我が国では参考業務をアメリカ図書館界からの受容とのみ見なす傾向が一般的であるが、むしろビブリオグラフィーとの重なりで考えた方が少なくとも学術図書館では適切ではないかと思う。この場合も、歴史的に連続の視点から見ることに利点があるように思う。

逆に、連続の視点でなく、断絶の視点といえ、それは基本的には図書館史をどのような章立てでみるかの問題となる。ここで社会史等が活用されることであろう。そして、歴史は勿論学術図書館に関するだけではない。いずれにせよ、図書館史が暗記科目であるとか、尚古趣味であるとかの批判は当たらない。そして、個人にもよるであろうが、図書館史の研究ではすでに解明されていることよりも未開拓の部分を押倒的に抱え込んでいるというのが実情である。歴史は、現在への不断の問い掛けとしての役割を果たすに違いない。

☆

☆

☆

先に、筆者は省令科目の見直しに積極的に寄与しようとする意図に乏しい旨を述べた。そして、その意味では要らざる感想を述べたともいえる。過日の本研究会運営委員会の後、河井先生らと語らった際、談たまたまこの見直し案が話題となった。このときの河井先生の話では、教育部会からの意見徴集で意見を書いたが、複数の意見とならなかったため意見として表には出せないということで没になったとの由。そのような次第から、もし会員諸氏で省令科目の見直しに関連して図書館史の位置付けについてご意見がおりであれば、是非事務局にお寄せ頂き、多数の方の意見として集約できればこれを取りまとめ、教育部会の方へ申し入れようかと思ひ、かく雑文をしたためたわけである。勿論、事務局へは単なる感想にとどまらずポイントを押さえた意見としておまとめ頂き、お送りください。場合によっては、ニューズレターの紙面に掲載し、論議を深めることにしたいとも考えています。ふるってご意見をお寄せください。

1990（平成2）年度 決算報告

〔収入の部〕		〔支出の部〕	
1) 会費	123,940	1) ニューズレター作成発送費	47,552
2) 前年度繰越	96,800	2) 事務局費	26,510
3) 貯金利子	2,052		
4) 緑蔭セミナー残金繰入	11,121	3) 次年度繰越	159,851
合計	233,913	合計	233,913

現在高（901231現在）		
貯金	125,923	} 計159,851
振替口座	31,940	
現金	1,988	

*『図書館史研究』7号の編集経費の支出については、運営委員会の承認が得られている。

監 査 報 告

1990年度の監査の結果、帳簿の記入、事務処理が適正に行われていたことを報告します。

1991年1月22日

監査 根本 彰 印
中林 隆明 印

1990（平成2）年度 事業報告

- 1 第8回図書館史を考える緑蔭（東京）セミナーの開催
1990（平成2）年9月1日（土）～ 9月2日（日）
大東文化会館において開催 参加者20名
- 2 機関誌『図書館史研究』第7号の編集作業中
- 3 ニュースレターの発行

・第38号-----1990（平成2）年2月15日	・第40号----- 10月15日
・第39号----- " 6月15日	・第41号----- 12月15日
- 4 運営委員会の開催

・ 第30回運営委員会	1990（平成2）年5月30日
・ 第31回運営委員会	1990（平成2）年12月22日

1991（平成3）年度 予算

〔収入の部〕		〔支出の部〕	
1) 会費	130,000	1) ニュースletter 作成発送費	90,000
		2) 事務局費	70,000
2) 前年度繰越	157,651	3) 予備費	127,651
合計	287,651	合計	287,651

* 本予算案は従来通り、年会費を¥1,000 として作成した。機関誌代を会費に組み込む部分が出れば、その分“預かり金”のような形となり、機関誌分が日外アソシエーツに移替え（支出）されることになる。

1991（平成3）年度 事業計画

- 1 第9回図書館史研究会京都セミナーの開催
* 後掲「開催の案内」を参照
- 2 機関誌『図書館史研究』第8号の発行
- 3 ニュースレターの発行

・第42号 -----1991（平成3）年2月	・第44号 -----1991（平成3）年9月
・第43号 ----- " 6月	・第45号 ----- " 11月
- 4 運営委員会の開催
研究大会については現地開催事務局をサポートするにとどまり、出来る限りその判断に委ねる。運営委員会の開催は、機関誌問題その他、必要に応じ開催することにする。

<予告> 第9回図書館史研究会京都セミナー開催について

1991年の図書館史研究会セミナーを、次のような要領で開催することになり、準備を進めております。詳細は、本紙次号に発表し、参加者を募集することになりますが、会員の皆様方には、スケジュールを調整していただき、是非御参加いただきますよう、概略をあらかじめ御案内する次第です。

1. 日 時-----1991年8月31日(土) 午後から9月1日(日) 夕刻まで
2. 場 所-----コミュニティ嵯峨野(京都府勤労者研修センター)
山陰線嵯峨駅下車ｽｸﾞ(J R京都駅より山陰線で約20分)
3. テーマ-----「戦争・検閲・図書館の自由と図書館の歴史」
河井弘志、奥泉和久、山口源治郎、岡村敬二、深井耀子、
油井澄子、村岡和彦の各氏の発表が予定されています。
4. 定 員-----50名

その他プログラム等詳細は、本紙次号に掲載の予定です。御期待下さい。

大会委員長 岩猿敏生

大会事務局長 石井敬三(大阪府立図書館)

大会委員

塩見 昇(大阪教育大学)

川崎良孝(嵯山女学園大学)

馬場俊明(京都産業大学図書館)

深井耀子(阪南大学)

前川和子(大谷女子大学図書館)

中川泰弘(京都府立図書館)

村岡和彦(大阪市立図書館)

図書館史関係文献目録 1990(稿)

- 石山 洋 『図書館学会年報』形成期(第18~31巻2号・通巻24~75号)(図書館学会年報36(2), p.88-92; 1990.6)
- 稲村徹元 本と人と 出会いめぐりあいーまぼろしの司書 中根肅治のことどもー(国立国会図書館月報 350, p.22-25; 1990.5)
- 岡村敬二 満鉄図書館蔵書集積の歴史(I)ー(II)(図書館学会年報36(1), p.1-8&36(2), p.69-76; 1990.3&6)
- 小川トキ子 岐阜県図書館史(8) (中部図書館学会誌32(1,2), p.28-51; 1990.10)
- 奥泉和久 日清戦争後の地方青年会と図書館活動(図書館学会年報36(4), p.183-93; 1990.12)
- 小黒浩二 大逆事件と図書館(図書館界41(6), p.280-87; 1990.3)
- 河井弘志 近代図書館学の形成(中部図書館学会誌32(1,2), p.81-104; 1990.

10)

- 川崎良孝 ジェシー・H・シェラの図書館史研究と『パブリック・ライブラリ
ーの成立』2 (図書館界41(5), p.230-42; 1990.1)
- 神崎政美 アメリカにおける隔離公共図書館の歴史 (短期大学図書館研究10,
p.69-74; 1990.4)
- 北嶋武彦 学会年報編集の思い出 (図書館学会年報36(2), p.84-87; 1990.6)
- 教育の体系 山本正巳校注 岩波 (日本近代思想体系6) 1990.1.22.
- 近畿病院図書館協議会15年のあゆみ (病院図書館10, p.1--131; 1990.3)
- 言論とメディア 松本三之介 山室信一校注 岩波 (日本近代思想体系11)
1990.5.22.
- 篠塚富士男 昭和初期の大学図書館 (大学図書館研究36(2), p.1-11; 1990.7)
- 清水正三 もうひとつの図書館史—米山忠治著『全協一般使用人組合東京市役
所分会』を読んで (みんなの図書館 159, p.48-55; 1990.8)
- シリーズ・対談・先輩に聞く 第1回 内容: 戦前・戦後の神奈川県図書館事情
その1 (戦前編)—その2 (戦後編) (神奈川県図書館学会誌64
-65; 1990.3&10)
- 末次義治 マッカーシーとその立法参考調査図書館—我が国における議会図書
館の原像— (図書館界42(1), p.16-31; 1990.5)
- 住谷雄幸 国立国会図書館の過去・現在・未来 (神奈川県図書館学会誌64, p.
1-14; 1990.3)
- 谷口一弘 北海道における新聞縦覧所資料再考 (短期大学図書館研究10, p.47
-51; 1990.4)
- ちばおさむ 本のある広場をめざして(1)-(6)—東京の図書館の四半世紀を生きて
— (みんなの図書館 152-153, 155, 158, 160, 162; 1990.1-2, 4, 7, 9
&11)
- 村上美代治 アメリカにおける図書館サービスの進展と兵士の読書要求—南北戦
争を中心にして— (大学の図書館203, p.204-11; 1990.9)
- 水口 忠 私と学校図書館の30年 (L I S N 62, p.7-10; 1990.3)
- 山口源治郎 1950年代における図書館法「改正」論争について—図書館法理念の
担い手の問題を中心にして— (図書館界42(4), p.234-45; 1990.
11)

(書評, 旅行記・印象記は掲載せず)

* 昨年暮れの運営委員会での石井敦先生の提案で図書館史関係の書誌を掲載す
ることにしましたが, もとより完全なものではありません。会員諸氏の論稿は
勿論のこと, お気づきのものがあれば事務局へお知らせ下さい。

(寺田 光孝)

✧ 編集委員会より
お詫び

『図書館史研究』第7号の刊行が大幅に遅れ, 会員の皆様には多大のご迷惑

をおかけしていますこと、お詫び申し上げます。

現在、編集の作業を進めておりますが、刊行までにはもう暫く時間を要します。5月下旬刊行の予定です。ご了解ください。

なお、刊行されれば会員諸氏にはあらためてご案内をさしあげます。

編集委員会 (&事務局)

— 原稿を募集します —

『図書館史研究』第8号(1991.9刊行予定)の原稿を募集します。テーマはいっさい限定しません。ふるってご応募ください。

締切: 6月末(投稿予定の方は5月末までに、その旨を宇治郷宛ご一報ください)。

応募: 原稿の送り先は下記のとおり。

宇治郷 毅 宛

注意: 400字で40枚程度。採否については、編集委員会で検討します。

※ 事務局より

会員消息

(新入会員)

- ・ 仏教図書館協会より事務局宛に『仏教図書共通分類表1989年版』の寄贈を受けました。関心のおありの向きには、実費(1部 1,000円)で分けて頂ける由。連絡先は、同協会

※ 会費納入のお願い!!

同封の振替用紙にて最寄りの郵便局より会費を納入して下さい。

なお、本年度より機関誌『図書館史研究』を予約購読するA会員(年会費2,000円)とこれまで通りニューズレターのためのB会員とに分かれます。機関誌の安定的発行を維持するためにも、できるだけ多くの方にA会員となっただけきたいと存じます。A会員として2,000円振り込んで頂いた方には『図書館史研究』8号(今秋刊行予定)より出版社から直接お手元に送付することに致します。

この封筒の名宛の紙片に“90”とある方は、A会員・B会員の別をご選択の上、本年度会費のみお支払い下さい。過年度分未払いの方で、6月までご納入のない場合は、2年度分滞納ということで慣例により除籍させていただきます。(不明の方はお問い合わせ下さい)